

社会教育研究部門

## 「青年の自立と教育文化」研究部会（第52回）

日時：2017年6月16日（金）14:00～16:00

場所：野間教育研究所 2F 閲覧スペース

出席：田嶋一・上野浩道・内藤俊史・齋藤智哉・青柳路子 各兼任研究員  
吉久知延所長・金沢千秋・泉水里香

内容：齋藤智哉氏の研究中間報告

◆青年の自立において「教養」が果たす役割に関する歴史的研究（仮）

1. 翻訳語としての「教養」—「修養」「教養」「教育」のトリアーデー

- (1) Samuel Smiles の『SELF-HELP』を訳出した『西國立志編 原名自助論』（1871年7月）における「修養」と「教養」
  - ・中村正直（1832～1891）が culture と cultivation を「修養」と訳した。「修養」が翻訳語として用いられた最初の例。中村がどのような文脈で「修養」を用いたのかを明らかにすることは、近代日本において自己形成概念として機能した「修養」を研究するうえで、必要不可欠である
  - ・『西國立志編』に「修養」は9例登場する。それらの訳出例の検討から、culture、education、cultivate 等と「修養」「教養」「教育」との差別化や関係を探る
- (2) John Stuart Mill の『ON LIBERTY』の翻訳本『自由の理』（1872年7月）における「修養」と「教養」
  - ・『西國立志編』刊行の翌年に中村が翻訳出版した『自由の理』には、「修養」が11例、「教養」が35例ある。「修養」の訳出例から、その内容を検討する
- (3) ロブシャイド『英華字典』における culture と cultivation
  - ・中村が用いた字典における訳語の検討
  - ・『英華字典』には、「修養」という訳語は存在しない。中村は自らの言語感覚と思想に基づいて、culture と cultivation を翻訳したようだ。なぜ「教育」と訳さなかったのかという問題は残る
- (4) 明治期の国内辞典・辞書における「修養」「教養」「教育」
  - ・「修養」が国内辞書に初めて掲載されるのは明治37年の『新編漢語辞林』

2. 教養主義と修養主義

- ・竹内洋を先行研究の主軸として整理

3. 高等教育における教養

- ・マーチン・トロウ『高学歴社会の大学』、吉田文『大学と教養教育 戦後日本における模索』などを先行研究の主軸として参考にする

・次回研究会は、7月21日（金）14:00～。